



移動表現の日英比較：小説とその翻訳を題材に（西光義弘教授還暦記念号）

小原，真子

(Citation)

神戸言語学論叢, 5:161-174

(Issue Date)

2007-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81001532>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001532>



移動表現の日英比較 小説とその翻訳を題材に*

小原真子

島根大学

1. はじめに

移動動詞を使用した表現は、日常的によく使われるものであるが、日本語と英語の移動表現を比べると、類型的な違いが存在する。移動表現の体系的な違いに着目した研究が、Talmy (1985, 1991)の移動動詞の語彙化の類型である。Talmyは、典型的な移動表現で、経路(Path)の概念が動詞の中に融合されて表現されるのか、前置詞や不変化詞などで表現されるのかによって、言語はverb-framed languagesとsatellite-framed languagesの2つに大きく分類できると主張している。英語を含む、ロマンス諸語以外のインド・ヨーロッパ語族はsatellite-framed languagesに、スペイン語などのロマンス語はverb-framed languagesに分類されると論じられている。移動表現に関しては、日本語はスペイン語と同様にverb-framed languagesに分類でき、英語と日本語の移動表現は単純に対応しない場面が多い。

- (1) a. The rock *slid/rolled/bounced down* the hill. (non-agentive)
b. I *ran/limped/jumped/stumbled/rushed/groped* my way *down* the stairs. (agentive)
(Talmy 1985 : 62-63)
- (2) a. 岩が丘を滑り/転がり/跳ね落ちた。
b. 私は階段を走り/びっこをひいて/跳び/つまずきながら/急いで/手探りで下りた。

(1), (2)を比較すると、英語では経路の概念が不変化詞*down*で表され、移動の様態が動詞によって表されているのに対して、同じことを表現しようとする、日本語では移動がV1+V2の複合動詞または副詞+動詞の形式を取り、英語とは逆に経路の表現が主動詞V2、移動の様態はV1または副詞で表現されている。このように、移動表現には類型的な違いが見られ、各言語の性質を考える上で、重要な要素となっている。

この論文では日本語と英語の移動表現の違いを、日本語の小説とその英語訳、英語の小説とその日本語訳とを比較することによって論じていく。セクション2では日本語と英語の移動表現の違いを簡単にまとめ、セクション3では、小説の翻訳をもとにして、言語間の違いを論じる。

2. 日本語と英語の移動表現

2.1. 有方向移動動詞と移動様態動詞

英語と日本語での移動表現で、相違を生じさせている要因の一つが、どのような種類の移動動詞が多いのかという点である。まず、移動動詞は、移動の方向性を内在的に含意する有方向移動動詞と、移動の様態を表す移動様態動詞の2つに大きく分けられる(上野・影山 2001)。この他にも、移動の様態も方向も含意しない、「動く、進む」等の語彙もあるが、その数は多くない。

多くの研究者が指摘しているように (Slobin 2005, 松本 1997, 2003等)、英語などの satellite-framed languagesでは移動の様態を表す移動様態動詞が多いのに対して、日本語のような verb-framed languagesでは移動様態動詞が少なく、有方向移動動詞が多い傾向にある。下にあげた(3)のリストは、Levin (1993)と上野・影山 (2001, 48)より、移動動詞の例を抜粋したものである。一見して分るように、英語では移動様態動詞が有方向移動動詞よりも多いのに対して、日本語では有方向移動動詞の方が移動様態動詞よりも多くなっている¹。

(3) 移動様態動詞

[英語]

amble, bolt, bounce, bound, canter, carom, cavort, clamber, climb, clump, crawl, creep, dart, dash, dodder, file, flit, fly, frolic, gallop, gambol, glide, hasten, hike, hobble, hop, hurry, jog, jump, leap, limp, lollap, lope, march, meander, mince, mosey, pad, parade, plod, prance, prow, race, ramble, roam, romp, roe, run, rush, sashay, saunter, scamper, scoot, scramble, scurry, scutter, scutel, shamble, shuffle, sidle, skip, skitter, skulk, slide, slink, slog, slouch, speed, stagger, stomp, stray, streak, sride, stroll, strut, stumble, stum, swagger, swim, tack, tiptoe, toddle, totter, traipse, tramp, troop, trot, trudge, vault, waddle, wade, walk, wander, zigzag

[日本語]

歩く、走る、駆ける、泳ぐ、はう、飛ぶ、滑る、うろつく、さまよう、急ぐ、跳ねる、跳ぶ

有方向移動動詞

[英語]

advance, approach, arrive, ascend, climb, come, cross, depart, descend, drop, enter, escape, exit, fall, flee, go, leave, pass, reach, recede, return, rise, traverse

[日本語]

移る、進む、行く、来る、着く、届く、向かう、近づく、近寄る、入る、上がる、登る、下がる、降りる、下る、落ちる、戻る、帰る、退く、遠ざかる、遠のく、出る、発つ、離れる、去る、逃げる、逃れる、通る、過ぎる、渡る、横切る

しかし、(3)の比較では、どの移動動詞が英語、日本語のどちらで多いのかが分りにくいので、英語と日本語の語彙を対応させたリストを(4), (5)に作成した。まず、有方向移動動詞の例を(4)にあげる。英語と日本語では、単純に語彙が対応しない例も多いが、ここでは最も主要と思われる意味で代表させた。

(4) 有方向移動動詞

移る：pass	進む：advance
行く、向かう：go	来る：come
着く：arrive	届く：reach
近づく、近寄る：approach	入る：enter
上がる：ascend, rise	登る：ascend, climb
下がる、下る、降りる：descend	落ちる：drop, fall
戻る、帰る：return	退く、遠ざかる、遠のく：recede
出る、発つ、離れる、去る：depart, exit, leave	
逃げる、逃れる：escape, flee	通る、過ぎる：pass
渡る、横切る：cross, traverse	

英語にも有方向移動動詞はあるが、その多くはロマンス語からの借入語である。(4)のリストにあるように、有方向移動動詞の場合、大部分の動詞が日本語と英語で対応関係にある。*ascend, leave, return*などの、いくつかの英語の動詞は日本語では複数の動詞の意味と対応することもあるが、有方向移動動詞の場合、英語と日本語の語彙の間に大きな差はないと言える。

これに対して、移動様態動詞の場合は(5)に見られるように、状況が全く異なっている。日本語では一つの語彙しかない動作に対し、それに対応するような語彙が英語では複数あることがわかる。有方向移動動詞の場合と同様に、2つの意味にまたがるような語彙もあるが、ここでは便宜的に主となる意味の動詞に対応させた。各リストの最後の数字はその中に含まれる語彙数を示す。

(5) 移動様態動詞

歩く : *amble, clump, dodder, hike, hobble, limp, lollop, mince, mosey, pad, plod, prance, ramble, roam, sashay, saunter, shamble, shuffle, sidle, skulk, slink, slog, slouch, stagger, stomp, stride, strut, stumble, stump, swagger, tiptoe, toddle, totter, traipse, tramp, troop, trudge, waddle, wade, walk* (40)

走る : *jog, lope, romp, run, scamper, scurry, scutter, scuttle, skitter, streak* (10)

急ぐ : *dart, dash, hasten, hurry, race, rush, scoot, speed* (8)

はずむ, 跳ねる : *bounce, bound, carom, cavort, frolic, gambol* (6)

さまよう, うろつく : *meander, prowl, rove, stray, stroll, wander* (6)

跳ぶ : *hop, jump, leap, skip, vault* (5)

駆ける : *bolt, canter, gallop, trot* (4)

登る : *clamber, climb, scramble* (3)

行進する : *file, march, parade* (3)

はう : *crawl, creep* (2)

飛ぶ : *flit, fly* (2)

滑る : *glide, slide* (2)

ジグザグに進む : *tack, zigzag* (2)

泳ぐ : *swim* (1)

このように、移動様態動詞が英語では多いと言っても、一様に多いわけではないことが(5)のリストからわかる。例えば、日本語の「泳ぐ」に対応する英語は*swim*だけであり、日英語で相違は見られない。これに対して、「歩く・走る・急ぐ」等の動作に対応する単語は多く、特に「歩く」ことに関連する動詞が非常に多いことがわかる。英語では基本的な*walk*だけではなく、細かな歩き方の違いに対応する動詞がそれぞれあり、場合によって使い分けられる可能性があることがわかる。

それでは、日本語では歩き方の違いを表すのに、どのような手段を使うのであろうか。日本語では歩き方の違いを一つの語で表すことはできないが、「歩く」ことに関して、細かな違いを出したいときには、主に、次のような3つの方法を取る。(5)のリストにある動詞を使って考えてみよう。ここでも、単純に日本語と英語が対応するわけではないが、便宜的に一つの語で代表させて分類した。

(6) a. 動作を修飾する擬態語を使う

こそこそ歩く(*skulk, slink*)、ちょこまか歩く(*mince*)、どしんどしん歩く(*clump, stomp, stump, tramp*)、とぼとぼ歩く(*plod*)、のしのし歩く(*tramp*)、ぶらぶら歩く(*mosey, pad, ramble, saunter*)、よたよた歩く(*lollop, totter, waddle*)、よろよろ歩く(*dodder, shamble, stagger, stumble, toddle*)

これに対し、方向、移動経路は移動にはっきりとした限界点がない場合の経路表現である。移動経路は日本語ではヲ格を取る名詞句で表されることが多い。方向は着点指向(toward, (leave) for)、起点指向(away from)に分けられ、起点・着点などの場合とは違い、移動の結果ある場所に到着する、または移動がある場所から始まったということは含意しない。

このように経路を下位分類してみると、日英語の相違が見えてくる。英語では、移動様態動詞はどのような経路表現を取ることもできるが、日本語では経路表現の種類によって、文法性が異なる。日本語でも、(11a)のように移動経路を表すとき、(11b)のように移動の方向を表すような経路表現の時には、移動様態動詞と一緒に使うことが可能であるが、(11c)のように、着点を含意するときは、有方向移動動詞が主動詞になることが必要となる。

- (10) a. She walked by the river.
b. I walked towards the door.
c. He walked into the shop.
- (11) a. 彼女は川のそばを歩いた。
b. 私はドアの方へ歩いた。
c. 彼は店の中に*?歩いた/歩いて行った。

また、影山・由本 (1997)があわせて指摘しているように、着点だけではなく、起点の場合にも同様の制約が存在する。英語の場合には、(12)のように起点を経路表現の一種として使うことができるが、日本語では移動様態動詞とは使うことができず、(13)のように有方向移動動詞が要求される。

- (12) a. He walked from the room.
b. She walked out the door.
- (13) a. 彼は部屋から*歩いた/歩いて出た。
b. 彼女はドアから*歩いた/歩いてでてきた。

以上の例から、日本語の移動様態動詞は、明確な起点及び着点を示す経路表現とは共起できず、有方向移動動詞の存在を必要とすることがわかる。同様の現象は、Aske (1989)によって、スペイン語でも観察されることが報告されている。

これらのことから、英語と日本語は、起点及び着点を表す経路表現と移動様態動詞とが共起できるかどうかという点でも違いがあるということになる。Aske (1989)は、スペイン語と英語の比較から英語の着点を表す前置詞は述語として機能することができるとし、方向を表す前置詞との扱いを分けている。これに対して、影山・由本 (1997)は英語のwalk to the stationのような表現は移動 (walk)と到達 (get to the station)を合成した表現だとし、英語ではこのような意味構造の合成が行われるという見解を述べている。ここでは、これらの分析を参考に、英語と日本語の移動様態動詞の文をもう一度比べてみよう。(14)では移動に関連する表現の下にそれぞれ移動の要素を対応させた。

- | | | | |
|------|---------|-------------|-------------------|
| (14) | a. She | walked | by the river. |
| | | [移動] + [様態] | [移動経路] |
| | a'. 彼女は | 川のそばを | 歩いた。 |
| | | [移動経路] | [移動] + [様態] |
| | b. I | walked | towards the door. |
| | | [移動] + [様態] | [方向] |
| | b'. 私は | ドアの方へ | 歩いた。 |
| | | [方向] | [移動] + [様態] |

c. He	walked	into the shop.
	[移動] + [様態]	[方向] + [着点]
c'. 彼は	店の中に 歩いて	行った。
	[着点] [移動] + [様態]	[移動] + [方向]
d. He	walked	from the room.
	[移動] + [様態]	[方向] + [起点]
d'. 彼は	部屋から 歩いて	出た。
	[起点] [移動] + [様態]	[移動] + [方向]

(14)の例を見てみると、[移動経路]と[方向]を表す場合には、英語でも日本語でも1つの経路表現で表現されるため、違いは生じない。しかし、[方向]と[着点]または[方向]と[起点]の表現が英語では一つの前置詞句で表されるのに対し、日本語では[方向]は有方向移動動詞で、[着点]または[起点]は後置詞句で表さなければならないという違いがあると言える。このことから、英語と日本語の違いは前[後]置詞句の機能の違いに還元されることがわかる。2.1で見た移動様態動詞だけではなく、経路表現を取ってみても、日本語では二つの要素を使って表さなければならないことが、英語では一つの要素によって表現されていると言える。

このセクションでは、日本語と英語での移動動詞の違い、中でも移動動詞の種類の違い、また基本的な用法の違いとして、移動様態動詞と起点/着点の共起制限について概観した。次のセクションでは、これらの違いをもとに、日本語と英語との間で翻訳した際にでてくる違いを観察する。

3. 小説の中の移動表現

セクション2で概観したように、英語と日本語では使える移動動詞の語彙に違いがあり、また経路表現の共起制限に言語間で違いがあるため、翻訳した場合には様々な相違点がでてくる。このセクションでは、英語の小説の移動表現を日本語に翻訳した場合と、日本語の小説を英語に翻訳した場合を比較する。

データを集めたのは、英語の作品が3つ、日本語の作品が2つである。このうち、『銀河鉄道の夜』に対しては、2つの英語訳を比較したので、翻訳の数は英語、日本語とも同数である。作品としては、年代的にも地理的にも様々であるが、移動表現がある場合に限り、その相違を比較したので、表現の仕方に多少の違いはあるものの、年代による影響は少ないものと考えられる。

(15) a. 英語

Montgomery, L.M. 1925 *Anne of Avonlea* (訳 村岡花子 1955)
 Christie, Agatha 1932 *The Thirteen Problems* (訳 高見沢潤子 1960)
 Elkins, Aaron 2000 *Skeleton Dance* (訳 青木久恵 2000)

b. 日本語

宮沢賢治 1956 『銀河鉄道の夜』 (訳 John Bester 1992, Roger Pulvers 1996)
 吉本ばなな 1988 『キッチン』 (訳 Megan Backus 1993)

ここでは、各々の作品から移動動詞を含む表現を任意に20前後抜き出して、比較した。日本語の作品では46例、英語の作品も46例を抜き出した。今回の分析は予備的なものなので、統計的な分析は行わなかった。

セクション2でまとめた日英語の相違から、英語から日本語の翻訳では、次のような変化が起こることが予測される。i) 1つの移動様態動詞が2つ以上の要素に分けて表現され

る(副詞、擬態語などの付加)。ii) 英語で移動様態動詞が起点/着点を取るときには、日本語では有方向移動動詞がつけ加えられる。日本語から英語への翻訳の場合にはこの逆である。なお、データ中の関係する箇所は、わかりやすくするために、有方向移動動詞には下線を、移動様態動詞には二重線を引いている。また、経路表現は波線を引き、様態を表す副詞表現には**太字**を用いた。

3.1. 移動様態

今回集めたデータの中では、有方向移動動詞を含むものは重複している例も含めて、英語作品で19例、日本語の作品で33例、移動様態動詞を含むものは英語作品で33例、日本語の作品で22例あった。データ数が少ないので、数の上からの単純な比較は出来ないが、傾向として、日本語では有方向移動動詞を使う割合が高いのに対して、英語では移動様態動詞の方が使われる割合が高いということが言える。ここでは、動詞の種類による翻訳の違いを見ていくが、まず、移動様態動詞の場合を見ていこう。

3.1.1 移動様態動詞

セクション2.1でまとめたように、英語には移動様態動詞が多く、日本語には少ない。このため、移動様態動詞が日本語の方にあるときには、ほとんど問題がなく、同じ意味を表す動詞が使われることが多い。

- (16) a. 「みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった。」 (『銀河鉄道の夜』: 70)
 a'. "The others-they ran like mad but they got left behind. Zanelli was the same. He ran as hard as he could, but he couldn't catch up." (Bester)
 a''. Everyone ran so fast but they missed the train. Even Zanelli ran like mad but he couldn't catch up with me.' (Pulvers)
- b. でも、まあ少し落ち着いて、駅まで歩いちゃったから、ちょっと飲み屋で飲んで、電車で帰ることにした。 (『キッチン』: 111)
 b'. When I calmed down somewhat, after walking as far as the station and having a drink in a little bar, I took the train.

また、英語には適当な語彙があるため、日本語で修飾語がついている表現や、複合動詞が使われている表現が、一つの移動様態動詞で表現されている場合がある。

- (17) a. 闇の中、切り立った崖っぶちを**じりじり**歩き、国道に出てほっと息をつく。 (『キッチン』: 83)
 a'. Inching one's way along a steep cliff in the dark: on reaching the highway, one breathes a sigh of relief.
- b. ジョバンニは俄かに顔いろがよくなって威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもっておもてへ飛びだしました。 (『銀河鉄道の夜』: 26)
 b'. His expression brightening suddenly, Giovanni gave a smart bow, picked up the bag that he'd put at the foot of the desk, and dashed outside. (Bester)
 b''. At this Giovanni's face suddenly lit up, he bowed to the man in the highest of spirits, took his satchels from the foot of the accountant's desk and darted for the door. (Pulvers)

また、英語には移動様態動詞が豊富であるため、walk, runのような基本的な移動様態動詞だけでなく、様々な移動様態動詞を使って翻訳してあることが多い。

- (18) a. ジョバンニは**一さんに**丘を走って下りました。 (『銀河鉄道の夜』: 228)
 a'. Giovanni ran straight off down the hillside, ... (Bester)
 a''. Giovanni sprinted down the hill. (Pulvers)
- b. 気がついてみると、さっきから、**ごとごとごと**、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。 (『銀河鉄道の夜』: 66)
 b'. When he recovered, the little train that he was riding in had been clattering along the tracks for some time. (Bester)
 b''. By the time he came to, he had, for sometime now, been chugging along on the little train. (Pulvers)

以上のように、移動様態動詞が少ない日本語から多い英語に翻訳した場合には、小さな変化しか見られないが、それでは逆に、英語で移動様態動詞が使われている場合、日本語に訳されるとどうなっているのでしょうか。そのままの形で日本語に翻訳できるときもあるが、多くの場合には、2.1で語彙を比較する際にも出てきた、擬態語(19)、副詞句(20)などの修飾語を使う方法が使われる。また、(21)のように日本語では、複合語が使われる場合もある。

- (19) a. Look at me, I'm waddling, not walking. (Skelton Dance : 67)
 a'. 見て、私、まともに歩いていないわよ、**よたよた**している。
- b. We wandered about and chatted and the time passed quickly enough. (The Thirteen Problems : 28)
 b'. わたしたちは**ぶらぶら**歩きまわり、おしゃべりし、そうしているうちに時はどんどん過ぎてゆきました。
- (20) a. He'd heard the commotion and crept back in time to watch Montfort haul Ely's body off. (Skelton Dance : 332)
 a'. 銃音を聞いたブスケが**そっと忍び足で**戻ってみると、モンフォールが死体を引きずっているのが目に入った。
- (21) a. Anne roved the orchards and the Haunted Wood, calling Dora's name. (Anne of Avonlea : 70)
 a'. アンはドーラの名をよびながら、果樹園や、『お化けの森』をさまよい歩いた。

(19)–(21)の例は、2.1の語彙の比較からも予測できるパターンではあるが、英語の移動様態動詞を訳す時には、Slobin (1996)の指摘にもあるように、様態を全く訳さないという方法も見られる。

- (22) a. Julie asked after he had filled her in on the day's bizarre developments while they strolled between the exhibits. (Skelton Dance : 210)
 a'. 展示を見ながら歩間にギデオンが今日の思いもかけない奇妙な展開について話すと、ジュリーは訊いた。

同様に、様態を訳さない上に、移動様態動詞ではなく、有方向移動動詞を使っている例もある。

- (23) a. I said decisively, and I turned sharply on my heel and walked up the street towards the cottage where I was lodging. (The Thirteen Problems : 59)
 a'. わたしはきっぱり言うてくると向きをかえ、わたしが泊まっている小さな家のほうへ通りをのぼって行きました。家まできたときです。

- b. The fat pony jogged over the bridge in Lynde's Hollow and along the Green Gables lane. (Anne of Avonlea : 55)
 b'. 肥えた馬はリンド家の窪地の橋をわたり、クスバート家の小径へ曲っていった。
- c. Anne, walking home from the post office one Friday evening, was joined by Mrs Lynde, who was as usual cumbered with all the cares of church and state. (Anne of Avonlea : 100)
 c'. ある金曜日の夕方、郵便局から帰る途中、アンはリンド夫人といっしょになった。リンド夫人はいつものように教会と国家の苦勞を全部一身に負って苦しんでいた。

このように、移動様態動詞を使うか、有方向移動動詞を使うかの違いはあるが、英語の細かい移動様態が日本語では全く表現されない場合がある。(23c)などは「歩いて帰る」という表現も使えないことはないが、文脈から類推できる情報のため、省略されていると考えられる。

文脈から類推できる移動様態に言及しない傾向は、ギリシャ語と英語の移動表現の比較でも指摘されている。ギリシャ語は日本語と同様にverb-framed languagesの一つであり、英語と比較すると、同じ状況を描写する時に、移動様態動詞ではなく、有方向移動動詞を使う傾向にある。しかし、英語話者が常に移動様態を明確にする傾向にあるのに対し、ギリシャ語話者の場合には、移動様態が類推可能な場合には省略し、類推不可能な場合には移動様態に言及する傾向にある (Papafragou et al. 2006)。同じverb-framed languagesの日本語でも、類推が可能であるかどうか移動様態への言及と関わっているように見えるのが興味深い。

以上、見てきたように、英語では豊富な移動様態動詞が日本語に翻訳される時には、様態を修飾語で訳すか、または全く訳さず、省略するという方法が取られる。それでは次に、有方向移動動詞を使った表現の比較を見てみよう。

3.1.2 有方向移動動詞

もともと使われているのが、有方向移動動詞の場合、日本語でも英語でも語彙の多さでは違いはないので、そのまま対応する有方向移動動詞で訳すことができると予測される。実際に、英語の原文で有方向移動動詞が使われている場合には、(24)の例のように、日本語でも有方向移動動詞が同じように使われる場合が多い³。

- (24) a. He left by different routes, and he never came home the same way twice. (Skelton Dance : 8)
 a'. 毎回違ったルートで出かけて行って、帰ってくるときも、二度と同じ道を通らないんです。
- b. He came forward into the room smiling in his genial way. (Thirteen Problems : 154)
 b'. 彼はいつものようにあいそよくにこにこしながら部屋の中へはいってきました。

また、反対に日本語が原文の場合でも、有方向移動動詞で訳している場合がかなりの割合で見られた。

- (25) a. 二人は、駐車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。(『銀河鉄道の夜』: 90)
 a'. They went into the little square outside the station, surrounded by ginkgo trees that looked like cut crystal. (Bester)
 a''. The boys came out onto a small square enclosed by ginkgo trees that looked hand-carved of quartz. (Pulvers)
- b. ところで、どうして私が行けることになったの? (『キッチン』: 94)
 b'. Yes. But by the way, why is it I get to go?

しかし、日本語から英語に翻訳した場合に多いパターンとして、原文にはない、移動様態動詞を使う例が挙げられる。

- (26) a. けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。(『銀河鉄道の夜』: 22)
 a'. Giovanni, though, gave a vigorous wave and marched straight on out of the gate. (Bester)
 a''. Giovanni hurried out the gate waving his arms high in the air. (Pulvers)
- b. 帰りは、ずっと公園を抜けていった。木々のすき間から、田辺家のマンションがよく見えた。(『キッチン』: 37)
 b'. On the way home we walked through the park. There was a good view of the Tanabes' building through the trees.
- c. 宿が立ち並ぶ街道をずっと下っていった。(『キッチン』: 120)
 c'. I walked for a while along a street thick with inns.

例えば、(26a)の場合、「どしどし…出て来ました」という表現が日本語では使われているが、英語では擬態語のニュアンスを訳すためであろうか、*hurry, march*などの移動様態動詞が使われている。また、(26b,c)の場合には、原文ではどのような様態で移動したかについての言及はないが、*walk*という移動様態動詞によって、英語では移動方法が特定されている。これは3.1.1で述べたことと関係しており、日本語では文脈から判断できる限り、移動様態については言及しないが、英語では、どのような場合でも移動様態を明確にする傾向にあるのであろう。

以上、見てきたように、日本語で有方向移動動詞が使われている場合には、英語でも対応する有方向移動動詞が使われる場合が多いが、移動様態動詞を使う場合もかなりの割合で見られる。このことは、英語は移動様態に着目して移動事象を描写し、日本語では方向に着目して移動事象を描写する傾向にあるという先行研究の知見を裏付けるものである(Slobin 1996)。

3.2. 経路表現

3.1では移動動詞の種類ごとに日本語と英語の比較を行ったが、ここでは経路表現を中心にして日本語と英語の対応を見ていこう。2.2で概観したように、経路表現が「移動経路」または「方向」を表している場合、すなわち非有界的経路である場合は、日本語でも英語でも表現に違いは見られないが、有界的経路である「起点」または「着点」を表す場合は日英語で違いが見られると予測される。日本語と英語の相違に着目しながらデータ収集をしたためかもしれないが、日本語と英語で全く経路表現に違いがない例はほとんどなかった。(27)は英語から日本語へ、(28)は日本語から英語に訳した例である。これらは全て非有界的経路であり、日本語でも英語でも表現上の違いは見られない。

- (27) a. Anne roved the orchards and the Haunted Wood, calling Dora's name. (Anne of Avonlea : 70)
 a'. アンはドーラの名をよびながら、果樹園や、『お化けの森』をさまよい歩いた。
 a. 気づくと場面はすぐに、冬の夜道を田辺家に向かって歩く私、になっていた。
 (『キッチン』 : 69)
 a'. When I regained enough composure to realize where I was, I found I was walking up the wintry street toward the Tanabes' apartment building.
- (28) a. I said as we climbed the hill homewards. (Thirteen Problems : 44)
 a'. 屋敷のほうへ丘を上って行く時にぼくは言いました。

実際の例としては、(28)のように「移動経路」であっても、日本語では有方向移動動詞が付加されている例もあり、日本語では移動様態動詞だけで経路表現を取ることがあまり好まれない傾向にあるのではないと思われる。以上見てきたように、非有界的経路の場合には日本語と英語で表現上の差は少ない。それでは、有界的経路ではどうであろうか。

有界的経路の場合には、英語では移動様態動詞一つと前置詞句で表されている移動事象が、日本語になるともう一つ動詞が付加されている例が多い。(29)は日本語で複合動詞が使われている例、(30)は動作を修飾する副詞句や従属節が使われている例である。いずれも、英語にはない有方向移動動詞が付加されている。

- (29) a. Moved by those forebodings, I ran up to his bedroom. (Thirteen Problems : 46)
 a'. 不吉な予感にはっとしてぼくは彼の寝室にかけのぼりました。
 b. He rushed to Anne, hurled himself into her lap, flung his arms around her neck, and burst into tears. (Anne of Avonlea : 73)
 b'. デイビーはアンのところへかけより、膝に身をなげかけ、アンの首にしがみついて、わっと泣きだした。
 c. Once there, the eager Toutou dragged them among the rocks, then sidled into a narrow crevice that had been invisible until they were almost on it. (Skelton Dance : 13)
 c'. ここまで来ると、やる気満々のトートーはごろごろ転がる岩の間に入って行き、まん前まで行かなければ、そんなものがあるとは気がつかない狭い岩の割れ目の中にもぐり込んだ。
- (30) a. No one saw her come in, so she must have entered by the side door and hurried straight up to her room. (Thirteen Problems : 160)
 a'. だれも玄関からはいってくるのを見ませんでしたから、横の入口からはいってすぐ自室に急いで上がっていったものでしょう。
 b. Poor Barbara stumbled back to her desk, her tears combining with the coal dust to produce an effect truly grotesque. (Anne of Avonlea : 85)
 b'. あわれなバーバラはよろめきながら、自分の席へ帰っていった。石炭の粉に涙がまざって、じつにグロテスクな効果をあげた。

また、経路表現に関しては、Slobin (1996)等にも指摘されているように、英語では、前置詞句で経路表現を表すことができるため、一つの動詞に対して、いくつもの経路表現を連続させることができる。そのような表現を日本語に訳した時には、(31)のように、一つの経路に対して一つの動詞が使われるのが普通である。

- (31) a. She marched him past a flimsy wallboard partition to a narrow hallway off which a row of offices, constructed from the same cheap wallboard, opened. (Skelton Dance : 139)
 a'. 彼女はギデオンを伴って、薄っぺらな板壁の仕切りを通して、狭い廊下に出た。同じ安っぽい板壁でできた研究室が廊下に面して並んでいる。

上の例では、英語では動詞はmarchだけであるが、日本語では「伴う、通る、出る」という3つの動詞が使われている。特に、「通る、出る」は「移動経路」、「着点」に対応した動詞である。

英語の前置詞句の働きを確認するために、これまでの例とは反対に、日本語から英語に訳した時の変化について見てみよう。2.2で概観した移動の要素についての考え方を適用すると、日本語では複合動詞「駆け込む、歩いていく」の中に、[移動] + [様態] + [方向] の概念が含意されており、経路表現は「着点」の意味しか担っていないが、英語では動詞が「移動」 + 「様態」だけを表し、前置詞句が「方向」 + 「着点」の二つの概念を表していると言える。(32)の例を見てみよう。

- (32) a. 行くバスの後ろ姿を見送って、私は思わず薄暗い路地へ駆け込んだ。
 (『キッチン』 : 50)
 a'. I watched it drive away, and then without thinking I ducked into a poorly lit alley.
 b. 彼女は私をきっ、とにらんで、
 「言いたいことは全部言いました。失礼します。」
 と冷たく言い放ち、コツコツ音を立ててドアへ歩いていった。
 (『キッチン』 : 101)
 b'. She gave me an evil scowl and said in a chilly voice, "I've said all I had to say. Excuse me." those were her parting words. With the click, click of her little beige pumps, she turned and walked to the door.

このように、英語の前置詞句は移動の「方向」と「着点」を同時に表すことができるため、日本語では必要な有方向移動動詞が使われない傾向にある。この性質を拡張して、移動動詞ではなく、appear, disappear等の、出現を表す動詞に前置詞句を付加して移動を表現している例も見られた。(33)では出現を表す動詞を小型英大文字にした。

- (33) a. バスがカーブを曲がってくる。目の前に流れてきてゆっくり止まり、人々は並んでぞろぞろ乗り込む。
 (『キッチン』 : 47)
 a'. The bus APPEARED around the corner. It seemed to float to a stop before my eyes, and the people lined up, got on, one by one.
 b. 「何だい。ザネリ。」とジョバンニは高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいっていました。
 (『銀河鉄道の夜』 : 42)
 b'. "Say that again, Zanelli!" he shouted back angrily, but Zanelli had already DISAPPEARED into a house with a cedar growing in front of it. (Bester)
 b''. Who do you think you are, Zanelli!' he screamed back. But Zanelli had already DISAPPEARED into a house with a white cedar tree in front. (Pulvers)

このように、英語ではsatellite-framed languagesという名称の通り、前置詞句が移動を表現する際に、重要な位置を占めており、この点で、日本語とは大きな相違点が見られる。

4. まとめと今後の課題

この論文では日本語と英語の移動事象を表現するときの言語的な違いを小説の翻訳を通して見てきた。最後に、verb-framed languagesとsatellite-framed languagesではどのような違いがあるのかをもう一度考えてみよう。日英語を比較した場合の相違点は大きく分けて以下の2点である。i) satellite-framed languagesは、動詞に様態が融合されているため、移動様態動詞が豊富である。ii) satellite-framed languagesは、前置詞句などで移動経路が表現される傾向にある。なぜこのような違いが出てくるのであろうか。

一つの可能性として、日本語は複合動詞が豊富で、英語は動詞＋前置詞の構文を使う傾向にあることが挙げられる。日本語も英語もそれぞれの言語でよく使う手段を使って、移動事象を表現していると言える。このように考えると、英語を含むゲルマン系の言語がsatellite-framed languagesに分類され、ロマンス系の言語がverb-framed languagesに分類されているのが、当然のことと考えられる。ゲルマン系の言語では動詞＋前置詞の構文を使うのに対し、ロマンス系の言語は複合動詞構文を使う傾向にある。

この仮説に対して、問題となるのが、Talmy (1985)がsatellite-framed languagesに分類した、中国語である。中国語は複合動詞構文を使うが、Talmyの言及以来、中国語の移動表現は英語と類似しているものとして扱われてきた。しかし、丸尾(2004)によると、中国語には i) 移動様態動詞が豊富にあるとは言えない。ii) 前置詞句で移動経路が表現されるわけではなく、動詞が使われる等、中国語には日本語との類似点も見られるようである。この点については今後の課題として取り組んでいきたい。

注

* 神戸大学文学部在学中から西光先生には大変お世話になりました。学部時代の西光先生の授業で印象に残っているのが、日本語の小説とその英語訳とを使って日本語と英語の性質を比較する授業です。自分の授業でも同様の手法を利用させていただいたりしています。この論文でも日本語の小説の英語訳を利用しました。

1 ここでは、移動様態動詞の中でも、有生の主語を持つことが多い、run動詞類に限って比較した。ここではリストに入れていないが、無生物の主語を取ることが多いroll動詞類でも、英語の方が日本語よりも種類が多い傾向にある。

2 floatの直訳である「浮く」「漂う」などは、日本語では移動動詞として使えず、有方向移動動詞をつけても文法的にならないため、ここでは「流れる」を使用した。

3 ごく少数の例では、英語で有方向移動動詞(または単なる移動動詞 cf.(ia,c))が使われているのにも関わらず、日本語で移動様態動詞が使われている。

- (i) a. Gideon and Julie turned down Joly's offer of a lift back to the Hôtel Cro-Magnon, preferring to walk the quarter mile, and started slowly on their way. (Skelton Dance, 67)
 a'. ギデオンとジュリーはホテル・クロマニヨンまでの四分の一マイルを歩くことにして、送ろうというジョリの申し立てを断わり、ゆっくりと歩き出した。
- b. And yet it doesn't seem to me that heaven would be quite perfect if you couldn't get a whiff of dead fir as you went through its woods. (Anne of Avonlea 40)
 b'. でも森を歩いて樅の枯葉の匂いをかけないのでは、天国も完全だとは思えないわ。
- c. 'Really, Barbara,' she said icily, 'if you cannot move without falling over something you'd better remain in your seat. (Anne of Avonlea 85)
 c'. 「まったく、バーバラ、なにかにつまづかなければ歩けないというのなら、いっそ、自分の席にいたらいいでしょ。

移動様態が付加されている例は、日本語から英語に翻訳した場合に比べて、数が少ないが、日本語で移動様態を明確にすることが好まれる表現として注目できる。

参考文献

Aske, Jon 1989. Path predicates in English and Spanish: a closer look. *BLS* 15 : 1-14.
 影山太郎、由本陽子 1997. 『語形成と概念構造』 研究社出版。

- Levin, Beth 1993. *English Verb Classes and Alternations*. University of Chicago Press.
- 丸尾誠 2003. 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』 博士論文：名古屋大学.
- 松本曜 1997. 「空間移動の言語表現とその拡張」 田中茂範、松本曜 『空間と移動の表現』 125-230. 研究社出版.
- 松本曜 2003. 「タルミーによる移動表現の類型をめぐる問題ー移動の意味論Iー」 『明治学院論叢』 695 : 51-82.
- Papafragou, Anna, Christine Massey and Lila Gleitman 2006. When English proposes what Greek presupposes: the cross-linguistic encoding of motion events. *Cognition* 98, B75-B87.
- Slobin, Dan I. 1996. Two ways to travel: verbs of motion in English and Spanish. In M. S. Shibatani & S. A. Thompson (eds.) *Grammatical Construction: Their form and meaning*, 195-220. Clarendon Press.
- Slobin, Dan I. 2005. Linguistic representations of motion events: What is signifier and what is signified? In C. Maeder, O. Fischer, & W. Herlofsky (eds.) *Iconicity Inside Out: Iconicity in Language and Literature* 4. John Benjamins.
- Talmy, Leonard 1985. Lexicalization patterns : Semantic structure in lexical forms. In Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description Vol. III : Grammatical Categories and the Lexicon*, 57-149. Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard 1991. Path to realization : A typology of event conflation. *BLS* 17 : 480-519.
- 上野誠司・影山太郎 2001. 「移動と経路の表現」 影山太郎編 『日英対照 動詞の意味と構文』 40-68. 大修館書店.

資料

- Christie, Agatha 1932. *The Thirteen Problems*. Fontana/Collins. (訳 高見沢潤子 1960. 『ミス・マープルと十三の謎』 東京創元社.)
- Elkins, Aaron 2000. *Skeleton Dance*. HarperCollins. (訳 青木久恵 2000. 『洞窟の骨』 The Mysterious Press.)
- 宮沢賢治 1956. 『銀河鉄道の夜』 筑摩書房. (訳 John Bester 1992. 『銀河鉄道の夜・宮沢賢治童話集 2 : NIGHT TRAIN TO THE STARS and Other Stories』 講談社インターナショナル, Roger Pulvers 1996. 『英語で読む銀河鉄道の夜』 筑摩書房.)
- Montgomery, L.M. 1925. *Anne of Avonlea*. Puffin Books. (訳 村岡花子 1955. 『アンの青春ー第二赤毛のアンー』 新潮社.)
- 吉本ばなな 1988. 『キッチン』 新潮文庫. (訳 Megan Backus 1993. *Kitchen*. Faber and Faber.)
-